

Nabob とは誰か? 18 - 19 世紀アングロ・インディアン の肖像をめぐって

難波 美和子

Who is Nabob?—On the Image of Anglo-Indian in the Long-18th Century

1

19 世紀のイギリス小説の代表作のひとつ、サッカレー (Thackeray) の『虚栄の市』(Vanity Fair)(1847) には、注目される語がある。第 2 章にある、つぎの場面の 'nabob' である。

'Isn't he very rich?' said Rebecca.
'They say all Indian nabobs are enormously rich.'
(W. M. Thackeray, *Vanity Fair*, chap. 2) .

この 'Rebecca' とは、登場人物のなかでもっとも議論の対象とされてきた人物である、ベッキーことレベッカ・シャープ (ロードン・クロリー夫人) (Rebecca Sharpe, or Mrs. Rawdon Crawley) である。ベッキー・シャープは、社会の最下層から最上層へと駆け上がろうとし、ほぼ成功を収める人物として造型されている。彼女の性格と能力、そして、彼女が用いた階級上昇の手段が議論の対象とされたのである。しかし、ベッキー・シャープは、社会秩序や価値観を転覆させるようなことはしない。彼女の階級上昇は、社会秩序に則り、上位階級の男性との「結婚」という方法によって達成される。彼女が男性を評価する際、問題となるのは、上層階級に属するか、そうみなせる程度に金を持っているかである。彼女は、自分との結婚が可能かどうかによって、好意をみせるだけの価値のある人物かどうかを判断する。

このベッキー・シャープの視野に、最初に「花婿候補」として登場するのは、「親友」アミーリア・セドリー (Amelia Sedley, or Mrs. Osborn, later Mrs. Dobbin) の兄、ジョーゼフ・セドリー (Joseph Sedley) である。彼女がジョーゼフを有力候補とみなすのは、彼が成功した商人であるセドリー氏の長男であることもあるが、それよりも、彼自身の資格によると考えられる。ジョーゼフにもらったカシミアのショールをベッキーにプレゼントしようとするアミーリアに、

ベッキーは、ジョーゼフが東インド会社社員としてインドに行っていたことと独身であることを始めて知ったかのように、上記の言葉を発するのである。その一方でベッキーは、アミーリアには、自分の関心を隠すようにしながら、アミーリアの心に、自分が彼と結婚する可能性のあることを想像するようにもっていく。語り手によれば、この社会では、若い娘は独身男性への関心をあからさまにすべきではないのだが、彼女は自分を自分で売り込む必要があった¹。ベッキーにとって、ジョーゼフ・セドリーが、会う以前から魅力的な人物と映ったのは、彼がインド帰りの者であったからだ。それは、「インドのネイポップは、すばらしくお金持ち」だという認識にあった。ここで問題なのは、イギリス人ジョーゼフ・セドリーが「インドのネイポップ」(‘Indian nabobs’)である、とは何を意味しているかということである、

そこでまず、一般的な英和辞典『リーダーズ英和辞典』で調べて見ると、こうある。

《史》[Mogul 帝国時代の]インド太守；[18-19 世紀ごろの]インド帰りの大富豪；[一般に]大金持；[口]〔derog.〕特定分野の]名士

これによれば、たぶん、ジョーゼフ・セドリーは、「[18-19 世紀ごろの]インド帰りの大富豪」なのであろう。しかし、「インドの」という修飾句はおかしい。彼は、イングランド人であるからだ。再度、辞典にあたると、‘Indian’ は、「インドの、インド人の」だけでなく、「インド在住のヨーロッパ人([特に]英国人)」という意味が掲載されている。まさに、問題の ‘Indian nabobs’ は、「インド在住英国人のネイポップ」と訳さなくてはならないことがわかる。しかし、‘nabob’ に「インド帰りの」とい意味があるというなら、そこに ‘Indian’ とつけるのは蛇足にすぎないか。あるいは、「インド帰り」と「インド在住の」というのは矛盾ではないのか。もし、サッカーの表現を論理的に矛盾無く解釈しようとするなら、‘nabob’ には、もはや「インド帰りの」という意味が落ちているということになろうか。

2

「ネイポップ」という言葉は、上で述べたように、もともと「ムガル帝国時代の地方官」の意味である。‘nawab’ ともつづり、‘nabob’ はそれが英語風になまったものとされる。『オクスフォード英語辞典』(以下 OED) の用例を見ると、‘nawab’ と ‘nabob’ は 17 世紀のイギリスとインドとの直接交易ととも

にほぼ同時期に登場し、常に平行して使用されるものの、やがて、‘nabob’がやや一般的なつづりとなり、やがて19世紀半ばからは‘nawab’が通常につづりとなるという変遷が推測される。使用法では、早くは、どちらも「ムガル帝国の地方長官」の意味でしか使用されていないが、18世紀の第四・四半期から、特に‘nabob’に「非常な金持ち。特にインドで富を得て本国に帰国した人」という意味が登場する。英語化したインドの言葉の用例を集めた辞書 H.Yule の『ホブソン・ジョブソン』(*Hobson Jobson*) (以下 *HJ*) では、この「インドで富を得て本国に帰国した人」を意味する用例は、18世紀第四・四半期に多用されたことがうかがえる。ただし *HJ* では‘nawab’はこの意味では使わないか誤用とみなしている。これらの用法からは、「インドで富を得た」という事実のみを指し示しているわけではなく、‘nabob’には様々な含意があることが窺える。そこで本論では、インド帰りのイギリス人をネイボップと称する用法とイメージが、18世紀後半のイギリスで形成される過程を検討する。特に、「ネイボップ」がインド帰りのイギリス人の金持ちを指す言葉となり、しかも風刺および非難の意味が込められるには、通過すべき転換点があるのではないだろうか。

イギリス本国において、どのような人物が、どのような文脈で「ネイボップ」と呼ばれたかは、歴史学において研究がなされている。その中では、ネイボップと呼ばれたのは、どのような人であり、何を行ったのか、何を批判されたのかという点を中心に議論がなされている³。18世紀第四・四半期において、イギリス本国では、インドで富を獲得することは、非人道的な行為を行った結果だとして時に厳しい非難の対象となった。最も有名なのはロバート・クライヴ (Robert Clive, Lord Clive) (1725-1774) であり、ウォーレン・ヘイスティングズ (Warren Hastings) (1732-1826) であるが、そのほかにもインドの略奪者として非難された人物は多く、またインドにおける東インド会社の行動もしばしば非難の対象となった。イギリス東インド会社がインドで軍事行動やさまざまな政治的介入を行って多大な費用を費やし、政府からの資金援助を必要とする一方で、多額の財産を形成して帰国した人々が、議会関係者やジャーナリズムから非難を受けた。このような批判の多くは、当時の人道主義的なものであったり、政策的な立場に基づくものであったと考えられるが、その背後には、急速に富裕になった者へのねたみもあったとみられる。彼らを批判する文章において、インドで富を蓄積して帰国した人々が「ネイボップ」と呼ばれたのである。ネイボップには、単に「インドで富を築いた」だけではなく、「違法な」または「残虐な」という非難の意味が込められていた。

しかしながら、ネイボップは18世紀半ば以降、イギリス本国の経済秩序を揺

るがすものとして激しい批判にさらされたものの、いわゆる「ジェントルマン資本主義」の体制に組み込まれることで批判の対象ではなくなり、むしろ体制を支える重要な要素になったと指摘されている⁴。ネイボップへの批判と擁護の変化は、18世紀末に、インドで富を蓄え、それをイギリス本国に持ち帰ることが、領土支配の確立とともに正当化され、社会制度をゆるがすものとはみなされなくなった。それに伴ってインドでの勤務は、本国では財産を確保できないジェントルマン階級の次男以下の地位を保全する「名誉ある」職となり、階級上昇をもくろむ中産階級には獲得する価値のある地位になったという⁵。これにより、財産を築いてインドから帰ることから非難の色彩が取り去られ、批判的意味を持っていた「ネイボップ」が使われなくなったというのである。

しかし、このような歴史資料による事例研究において、「インドで莫大な富を（しばしば非道な手段で）蓄積してイギリス本国に帰国した人」を風刺してネイボップと呼んだ理由は、十分に説明されていないように思われる。つまり、明らかになっているのは「ネイボップ」と呼ばれたのはさまざまな方法でインドで富を得て、それをイギリスの上流社会への足がかりにしようとした中・下流出身のイギリス人を批判的に指示する用語だ、ということなのである。繰り返すが、ネイボップはナワブの転訛であり、英語においても当初の用法は「ムガル帝国の地方における皇帝の代理人、地方長官、太守」である。したがって、称号としての使用が主であり、そこに否定的な意味は含まれない。マドラスにおけるイギリス人女性たちとネイボップの夫人との面会を記述した1743年出版の *A Letter from Madrass...&c* でも Nabob は 'a great Man call'd the Nabob, who is the next Person in Dignity to the Great Mogul'⁶ と、その地位が説明されているのであって、本文中に当地の支配者に対する風刺、または非難の含意は特には読み取れない。

OED の 'nabob' の項によると、4. までである意味の 2. として「非常な金持ち。特にインドで富を得て本国に帰国した人」の用例の初出は、1764年のホレス・ウォルポール (Horace Walpole) の手紙における記述である。

Mir Jaffier and Cossim Aly Cawn, and their deputies Clive and Sullivan, or rather their principals, employ the public attention, instead of Mogul Pitt and Nabob Bute; the former of whom remains shut up in Asiatic dignity at Hayes, while the other is again mounting his elephant and levying troops.' (Walpole, *Letters*, vol. 4. p.222) (下線引用者)

厳密にいうならば、ここでの Nabob の用法は、‘nabob’ 2. の意義には当てはまらない。祖父がインドでの貿易活動で財産を築いたというウィリアム・ピット（大ピット）（William Pitt, the elder）はともかく、ビュート伯（Earl of Bute）の経済的・政治的基盤はインドではなく、いわゆる「成り金」とも言いがたい。したがって、この意味での初出としての例示は適切ではない。当時の政界の中心人物であるピットとビュートをウォルポールはしばしばギリシアやローマなど古典世界の僭主や暴君の名であてこすっており、この用法は、そのような尊大さを表現するのに ‘nabob’（と ‘Mogul’）が使われたと読める。ただし、前後の文を含めて読むと、ピットやビュートへのウォルポールの皮肉な見方が、ロバート・クライヴをネイボップとしてイメージする視線と交錯すると見なすことは可能であろう。

ピットとビュートに関しては、彼らの尊大さをを風刺する形容詞として、ムガルやネイボップは用いられているのであり、「インド帰り」のイギリス人であることや、「インドで一財産を作った」という含意はない。だが、ベンガルの太守たちとクライヴ（とサリヴァン）を同類として扱うことで、クライヴを「ネイボップ」とみなす文脈に近づいていると読める。またウォルポールはこの時期、ロバート・クライヴが再びインドへの派遣されることを批判して、彼を ‘Lord Clive, the Great Mogul’（Walpole, *Letters*, vol. 4, p.204.）と呼んでいる。その意味では、クライヴをネイボップと呼ぶことは、彼の格が低下したとも見れそうであるが、インドの活動で得た威信をイギリス本国で利用することへの批判として用いられていることから、‘nabob’ の「インド帰りの成金」の用法に近づいている。それでもなお、ネイボップに否定的意味が付与されることの説明はできないのである。クライヴやその同僚たちが「ネイボップ」と呼ばれ、彼らが強欲や暴虐によって非難されることで意味が悪化したのか、インドの太守を指し示す段階で、強欲や暴虐のイメージをイギリス人が持ち、それによって、インドでそのような行動を取るイギリス人をもネイボップと呼んだのか。

ロバート・クライヴをブラッシーの勝利者へと導く、東インド会社とアルコットの太守（ネイボップ）やベンガルの太守やインドにおけるフランス勢力との一連の対立は、東インド会社軍のみによって闘われたわけではなく、イギリス海軍が重要な役割を演じた。その艦隊付きの医師であったエドワード・アイヴズ（Edward Ives）は、この間の自身の見聞記録の中に、両軍の戦闘の様だけではなく、衝突に至るまでの太守と艦隊司令官ワトソン提督（Admiral Charles Watson）の書簡や使者の往来を記録した *A Voyage from England to India...* を記した。お互いに彼我の正当性を述べる記録であり、太守の意図的な遅延、言

い逃れなどがめだつが、このような関係が直接に太守=ネイポップを悪辣なイメージに結び付けたとは考えにくい。また、アイヴズが記述するクライヴは海賊アングリア (Angria) 討伐の後、獲得した金の分け前を多く得ようとしつつくワトソン提督に食い下がる人物であるが、だからといって、ただちにクライヴとインドの太守たちのイメージが結びつくとも思えない⁷。ベンガルの太守シュジャー・ダウラ (Shuja al-Daula) はカルカッタの占領によって決定的な悪名を被るが、だからこそ、そのイメージをインドにおけるイギリス人に冠するには、飛躍がある。

このようなレッテルは、イメージの軽率な飛躍によって起こるのかもしれないが、ウォルポールとその周辺が、その飛躍が了解された場所であった可能性が高い。ウォルポールは、OEDが挙げる例に先立って、「ネイポップ」という語を、インドの富と関連させて使用している。1761年3月3日付、サー・ホレース・マン (Sir Horace Mann) 宛ての手紙において、‘West Indians, conquerors, nabobs, and admirals attack every borough; there are no fewer than nine candidate at Andover.’ (Letter, vol. 3, p.379) と、次の選挙によって起こる議会の激変を憂えている。成金たちが選挙に出ることで、必要経費が急激に増加して、これまでの議員の多くが落選するだろう事を推測しているのだが、「選挙区」を攻撃するものとして筆頭に挙げられている「西インド人たち」とは、当時の文脈から推して西インド諸島の砂糖プランテーションの不在地主であろう。彼らと並んで立候補者として挙げられる「ネイポップ」がムガル朝の太守を指すとは考えにくいので、インドで富を築いた、もしくはインドに行ったことはなくとも東インド会社に関わり、選挙区を買収できる人物を指していると考えて間違いないのではないか。「インド帰り」と限定することは難しいが、まさしく「インドで富を蓄えた人」を意味する事例である。しかも、インドの富を選挙区を買収によって議席を獲得し、ジェントルマン階級に上昇しようとする成り上がり者として、批判的言説の対象となっている。‘nabob’の「インド成金」の初出例としては、こちらがより適切であろう。

3

「インド問題 (Indian affair)」をめぐるさまざまな当てこすりや罵倒が飛び交う中、1772年のサミュエル・フット (Samuel Foote) の劇『ネイポップ』(Nabob)で、この語に新しい定義が定着したとされている。「インドで一財産を作った成り金」というだけでなく、「傲慢で悪辣な」人物であり、秩序を脅かす人物を指す「ネイポップ」のイメージが確立されたのは、この芝居によるとされ、こ

の見解は1783年の論評「ふさわしい馬に鞍を…」(*The Saddle put on the Right Horse*)⁹にもすでに見られている。この芝居でネイボップとして名指しされているサー・マシュー・マイト (Sir Matthew Mite) は、必ずしも一人の人物ではなく、複数の有力な、インドで一財産をなした人々を組み合わせで造形されたと考えて差し支えないだろう¹⁰。だが、観客は具体的な人物を思い浮かべたことだろう。それは、人によってはクライヴであったかもしれないし、ホルツマンが述べるようにリチャード・スミス将軍 (General Richard Smith) であったかもしれない¹⁰。また、HJの‘nabob’の用例によると、1773年には、ボズウェル (Boswell) の記録にサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) がネイボップをやはりインドと富の文脈で用いている¹¹。やはり1773年に出版された*The Nabob: An Asiatic Plunder*でも、ネイボップはインドの太守の意味ではなく、当然のこととして、イギリス人として問題にされており、フットの『ネイボップ』に言うような「暴虐な」「貪欲な」人物であり、叙爵によって権力に近づくものとされている。

これらの点をあわせて考えると、1760年ごろから1772年までの間に、「インド問題」がさまざまに議論される中で、ネイボップという言葉がクライヴやスミスのような、貿易ではなく軍事や政治活動で富裕になったとみなされるような人物を一括して指示する用語として作り上げられる過程が存在した。記録として残されているかどうか不明だが、そのような合意形成があったことによって、フットの『ネイボップ』における人物造形が受け入れられたのである。そのような人物は、貪欲さによって、不法な手段で財貨を手にした、非難されるべき人物とみなされたのである。この合意は、現実のインド帰りの成金にも適用されて、悪化するイメージをさらに強めたことだろう。

「インド問題」の次のピークとも言うべき1780年代後半には、エドモンド・バーク (Edmund Burke) による激烈なヘイステイニングズ批判が有名である。その前にバークは1783年、東インド会社に関するフォックス法案 (Fox's Bill) についての長い演説の中で、東インド会社の社員養成を ‘goes out an insignificant boy, in a few years returns a great Nabob’ (Burke, p.525) と論難する。この演説では、アルコットのネイボップ (Nabob of Arcot) やアウドのネイボップ (Nabob of Oudh) と東インド会社との間の諸問題への言及がなされているにもかかわらず、この部分では、ネイボップはイギリス人が「なる」ものとして問題視されている。しかし、インドへ同化することは意味しない。地名を表す固有名詞を伴わないネイボップは「インドで一財産をなしたイギリス人」を意味している。ウィリアム・ヒッキー (William Hickey) がインドへ出発するにあたっての周囲

の反応と自身の期待を述べる中に、まさにバークによって非難されるような認識が描かれている。

Mr. Walter Taylor ... presented me with a beautiful cut and thrust steel sword, desiring me to cut off half a dozen rich fellow's heads with it, and so return a Nabob myself to England. (Hickey, vol.1. p.119)

これは、バークによって批判されるとおりの、頼りない若者の安易な冒険心に彩られたイメージと言えるだろう。ヒッキーが東インド会社の若い見習い士官として出航するのは1760年代、クライヴの二度目のインド勤務の時代であり、第二の意味のネイボップが流通し始めたころのことである。ただし、これは回想録であるので、後年のイメージが遡って描写されているのかもしれない。

バークによる東インド会社批判は有名であるが、当然ながら、東インド会社の立場からの反論も行われている。1783年の *The saddle put on the right horse* というパンフレット¹¹ は、ネイボップが「東インド会社を非難する用語となっている」が、本来は風刺あるいは批判めいた意味を持たないと指摘して、ネイボップの意味を再定義していく。目的は東インド会社の諸活動とそれをリードする人々の擁護である。しかし「真の (real)」ネイボップ、「にせの (spurious)」ネイボップ、「評判のよい (reputed)」ネイボップ、「成り金の (mushroom)」ネイボップと細分化し、著者が賞賛されるべき存在と強調する「真の」ネイボップは存在を後退させる。

Amongst these scanty returns, we must look not only for our real, spurious, and reputed Nabobs, but also for another race, which I shall call *mere adventurers*, or *mushroom Nabobs*—A set of men, who have caused almost as much scandal, by their indiscreet conduct after their return, as the spurious Nabobs themselves. (*The Saddle put on the Right Horse*, p.23)

一般にネイボップと呼ばれているのは、著者が mushroom と呼ぶ人々のことであるのだが、そのような人々が増えることで、イギリス国内では、ネイボップのインフレーションが起こったといえそうである。ネイボップがかなり広い意味の「インド帰りの成り金」の意味で用いられようになるのは、この時期だろう。意味がステレオタイプなものとして定着していることは、「ネイボップの逸話をちりばめた」という副題をもつ1785年出版の小説『アンナ』(*Anna, or memoir of a Welch Heiress*)でも、登場人物をネイボップと呼ぶことで人物を説明してしまうことからもうかがわれる。

以上のように英語におけるネイボップの使用例の変化を見ていくと、1740年代から50年代にかけては、本来の意味で、しかも「インドの地方官」という説明つきで使われていた。60年代からは「インドの君主のように振舞う人」という比喩として、用いられる一方で、インドから富を持ち帰ることで、イギリス本国の経済秩序を脅かしたり、階級秩序の侵入しようとする人を批判的に指示する言葉となり、強欲さや無作法さなどが強く意味されるようになった。しかし、この用法の背後には、ジェントルマン階級の秩序を脅かすものへの不快に基づく意識的なイメージ操作がこめられていた。このイメージ戦略が彼らの手を離れ、フットの『ネイボップ』を産み、「インド帰り」を表象する強力な記号となった。社会・経済の側面からは1790年代以降、「ネイボップ」の批評的意味は使用頻度が低下し、その役目を終了させるようだが、文学テキストの中では、イメージとしてのネイボップは表象の意味を曖昧なものに弱めながら、描き続けられることになるのである。

4

サミュエル・フッドの『ネイボップ』のサー・マシューは、財産を貴族階級への参入手段として利用しようとして、結局は失敗する。彼は教養がなく、礼儀作法も自己流で傲慢な人物である。と同時に、より世故に長けた人々に逆に搾取される道化でもある。フットの『ネイボップ』でも『アンナ』でも、ネイボップがもくろむ上流階級の女性との結婚は頓挫する¹¹。このサー・マシューの脅威のイメージは、平和で伝統的なイングランドの村の秩序を脅かすラパン氏 (Mr. Rapine) によって引き継がれる。

ほぼ無名の作家ライス夫人 (Mrs. Rice) によるその名も『ネイボップ、道徳的物語』(The Nabob: A Moral Tale) (1807) の一家の主人ラパン氏は「東洋においてネイボップだった」(one of who had been a Nabob of the East.) (Rice, p.8) とされる人物である。彼とその家族 (妻と三人の娘) はインドで覚えた贅沢三昧が忘れられない成り上がり者である。語り手は容赦なく、彼らの奢りと出自を賤しめる。

[Mrs. Rapin's] own inducement principally was, to display her magnificent style of living among the women of her native country. She was of obscure birth, descended from parents who were venders of small-wares, at a petty town in the west Yorkshire. (Rice, pp.9-10)

ラパン氏は実はイギリスに戻ってからの贅沢のせいで財政状態が厳しくなり、

節約のために田舎の領地を買って住むことにするが、表向きは、ジェントルマンの地位を確保するためと見せている。この新しい領地で、彼は借地人たちから高い地代を取ろうとして、村の中に困惑と苦悩と怒りを引き起こす。財政状態の悪化に気づいていない女たちは、屋敷をロンドンの友人たちに見せるために大掛かりなパーティを催す。そのパーティの終了とともに、ラバン氏の破産が告げられ、屈辱のあまり彼は心臓発作を起こして死ぬ。そして、かつて財政難のためにこの土地を手放した持ち主が帰ってきて、屋敷と土地を取り戻す。

テキストの中で「ネイポップ」はラバン氏を指す言葉として再三用いられ、彼の属性を示すものとされている。彼をネイポップと呼ぶことで、その行動の非イギリス性が説明される。ラバン氏だけではなく非イギリス性は妻と娘たちの属性ともされて、嘲笑の対象となる。

Wituout any respect for the moral obligations of man, they prepossessed almost no one quality of mind which could distinguish them from the barbarians of their native country. (Rice, p.12)

ラバン一家はイギリスにおける野蛮人である。それはただ低い出自のためではなく、「東洋で」身に着けたものなのである。一方、かつての地主であるサー・チャールズは思いやりがあり、公正な人物であるとされる。この二者の対比によって、古き善きイングランドの伝統に対する、「東洋の専制者」の脅威が描かれ、結局は後者が排除されることで、理想的な階層秩序が回復する。ネイポップであるラバン氏は、サー・マシューと同様にイギリスの階層秩序を脅かすものとして登場し、サー・マシュー以上に徹底的に排除される。善きものとしてのイングランドの地方というイメージがあからさまに謳いあげられる¹²。サー・チャールズが経営努力を放棄し、貧しい貸借者への配慮もせずに大陸へ遁走した過去はまったく不問に付され、今や、彼は事業にも成功し、英雄として帰還する。すべての秩序が古き善き時代に帰る。ネイポップは外部から富を持ち込むことで、ロンドンの階級社会を脅かすのみならず、幸福なイングランドの徳性を脅かす。しかし、イングランドの徳性は、外部からの侵入者に戸惑いはしても、結局は打ち勝つ。あたかもフランス革命の余波を受けた保守的な社会の空気を反映した、秩序回帰願望が伺われる。ラバン氏と言う「ネイポップ」はインドにおける略奪者、帝国の拡張者であるかは問題ではなく、イングランドに対する秩序破壊者として立ち現れている。むしろ国内的な存在であり、インドの広大な地域を支配したり、イギリスのインド政策を動かすようなイメージはない。すでにフットに見られたネイポップの道化化が一層進んで単なる成り

金としか描かれなくなっている。

ラパン氏の地主としては自己破壊的な行動は、イングランドを舞台にしていることを除けば、マライア・エッジワース (Maria Edgeworth) によって描かれた『ラックレント城』(Castle Rackrent and Ennui) のマータ卿やキット卿の代理人のやり方を連想させる。おそらく作者の意図は、「ネイボップ」の呼称によって、植民地支配を問おうとしているのではなく、農民の伝統的な生活習慣を破壊する新しい種類の地主層を「非イギリス的」なものとして強調する記号として「ネイボップ」は機能しているのである。『ラックレント城』では、「ネイボップ」という記号は、異国風のイギリス人を表象するものとなり、語り手サディは、ユダヤ人であるキット卿夫人を「弁護するため」にあのかたは「ネイボップ」なのだとの召使いたちに説明しようとするのである¹³。

『虚栄の市』でベッキー・シャープが口にする「インドのネイボップ」には、パークや『アジアの略奪者』の著者が意図したような非難の意味は与えられていないし、秩序を脅かすものとして指弾されているわけでもない。ベッキーがアミールリアに「あなたの兄は収奪者だ」と非難することはありえないので、表面上は「良い仕事についている」という以上の意味を持たせているとはみなせない。その一方で語り手は、ジョーゼフ・セドリーという人物を徹底して見栄のために虚言する、無気力で、展望や理想を持たない官吏として描く。暴虐も残酷さもなにかわりに、インドへの無関心が彼にはまわり付いている。

「ネイボップ」という語は、政治的に急速に影響力を得ようとしている「インド帰り」の新興富裕層を指し、排除するための隠語として成立したが、「インド」を含意しながらも、インドを指し示すことのない記号だった。その批評性と排除の印は、1770年代以降の文芸化の過程の中では、道化の側面が強調されるようにもなる。19世紀に入ってからは、ネイボップは、善良な人々の生活を脅かす道徳的な欠落や、伝統的価値観と相容れない「異国性」を一言で表す記号と化していく。「ネイボップ」は社会的な批判性を失っていることが見てとれる。『虚栄の市』では、歴史的な意味が喪失することによって、セドリーという人物を空疎に描く効果を上げているのではないか。「ネイボップ」はインドの「ナワーブ」たちが実際の力を失うのと同様に、権威を喪失し、ジョーゼフ・セドリーへと矮小化されたのである。

注

- 1 Thackarary, p.19.
- 2 『リーダーズ英和辞典 第2版』研究社。ただし一般的な辞書の多くには、‘nabob’の項目は見当たらない。
- 3 Holzman, *The Nabob in England*, 1920, および、Spear, *The Nabobs*, 1963 など
- 4 川北稔、1998. Pp.63-66.
- 5 浅田、2001. p p.109-136
- 6 *A Letter from a Lady at Madrass*, p.1.
- 7 クライヴがより多い分け前を要求したのは、本人の強欲のためではなく、当時、イギリス王の軍隊と東インド会社軍の間の歴然とした待遇差があり、兵士の不満となっていた。そこで、クライヴは部下のために分配の割り増しを要求したと弁護する言説も、同時代から存在した。
- 8 匿名だが、浅田によると Joseph Price なる人物の著作。
- 9 浅田、2001. p.
- 10 Holzman, p.162,
- 11 歴史上の事実としては、ロバート・クライヴの息子でやはり東インド会社で活躍したエドワード・クライヴはポウイス伯の妹と結婚し、後に息子の後見として爵位を得たという例も存在する。
- 12 サー・チャールズの跡嗣ぎとなるだろう甥は、西インドで兵士であった父を持つ。伝統的階層秩序に回帰しながらも、すでに植民地の人的ネットワークを排除することはできないことを示している。
- 13 「それがしはできるだけよく言ってさしあげようと気を遣い、台所の中では奥様のことはネイボブだといって通したのです。こう申せば奥様のお色の黒いことも、何もかも格好がつくかと思ったのです。」(p.44) このサディの語りでは、「ネイボブ」が「インド人」を意味している可能性も読める。しかし、インドから帰国したイギリス人女性に「黒さ」あるいは「黄色さ」が伴うことは、ライスの『ネイボップ』にも見られる言説である。

参考文献

- Anonymous, *A Letter from a Lady at Madrass to her Friends in London: Giving an Account of that Place, with his Lady and others, to the NABOB (prime Minister to the Great Mogul) and his lady, &c.*, (London) , 1743. (British Library 所蔵)

- Anonymous, *The Nabob: or, Asiatic Plunderers. A Satyrical Poem, In a Dialogue between a Friend and the Author. to which are annexed, A few fugitive Pieces of Poetry.* London 1773. (British Library 所蔵)
- Anonymous, *The Saddle put on the Right Horse; Or, An Enquiry into the Reason Why certain Persons have been denominated NABOBS,* (London) , 1785. (国立国会図書館所蔵)
- Bennett, Agnes Maria, *Anna, or Memoirs of Welch Heiress. Intersperse with anecdote of a nabob.* (London) , 1785. (British Library 所蔵)
- Burke, Edmund, *The Works: Twelve Volumes in Six.* vii.I/II. (1887) , (reprint 1975, New York)
- Edgeworth, Maria, *Castle Rackrent*, 1800. (マライア・エッジワース『ラックレント城』大嶋磨起・大嶋浩 訳、開文社出版、2001年)
- Foote, Samuel, *Nabob*, (London) 1778. (London University 所蔵)
- Hickey, William, *Memoirs of William Hickey, vol. I: 1749-1775.* (London) , 1913
- Holzman, James M., *The Nabob in England: A Study of the Returned Anglo-Indian, 1760-1785,* 1920. (reprint 1988, Culcutta)
- Ives, Edward, *A Voyage from England to India, in the Year MDCCLIV. And an Historical Narrative of the Operations of the Squadron and Army in India, under the Command of Vice-Admiral Watson and Colonel Clive, in the Years 1755, 1756.1757; including a Correspondence between the Admiral and the Nabob Serajah Dowlah. &c.,* (London) 1778. (British Library 所蔵)
- Rice, Mrs., *The Nobob: A Moral Tale*, London, (1807) (British Library 所蔵)
- Spear, Percival, *The Nabobs: A Study of the Social Life of the English in Eighteenth Century India*, 1963. (London) .
- Thackeray, William Makepeace, *Vanity Fair*, 1847. (2001, London)
- Whelm, Frederuck G. *Edmund Burke and India: Political Morality and Empire.* (Pittsburgh) , 1996.
- Walpole, Horace, (ed. Peter Cunningham) *The Letters of Horace Walpole, Fourth Earl of Orford*, 4 vols. (Edinburgh) , 1906.
- Yule, Henry, and A.C. Burnell, and William Crooke, *Hobson-Jobson: A glossary of Colloquial Anglo Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive.* Culcutta, 1889 (reprint 1990)

浅田實『イギリス東インド会社とインド成り金』、ミネルヴァ書房、2001年

川北稔「二重帝国の時代」(村岡健次・木畑洋一編『世界歴史大系 イギリス史3 近現代』、山川出版社、1998年)